38

「脈経」中に見える脈状の相関関係

中川俊之
日本鍼灸研究会

緒言

『脈經』は、二八〇年ごろ編纂された脈診記載を中心とする医書である。巻第一冒頭の二十四脈状が有名であるが、そればかりでなく、全巻にわたり脈状の記載がある。それらは様々な医書からの寄せ集めであり、内容は雑多である。従って二十四脈状から切り離しての検討が必要である。ここでは試論として、『脈経』中の脈状における相関関係を浮沈遅数を中心に検討したいと思う。

浮脈に関連する脈状

浮脈と多く見える脈状は、大脈、濇脈、緊脈、芤脈である。

（1）大脈が浮大として最も多く見える脈状である。大脈は二十四脈状には含まれない。浮大には浮洪大（実）と浮虚大（虚）の二系統が有る。浮洪大は浮大と通用し、浮洪大、洪大、浮実大は脈證からほぼ同じ脈状と思われる。また、浮虚大、浮虚、浮弱も同じ脈状である。浮洪大は傷寒による発熱等を表し、浮虚大は、下痢、発汗後の津液の損耗による発熱を表す。

（2）濇脈は浮濇として、「五蔵無精」を表し、浮微と通用する。また、浮濇は浮虚渋（濇）となる例が有り、浮濇と浮虚は近しい脈状である。

（3）緊脈は浮緊として、主に傷寒を表す脈として見える。

（4）芤脈そのものが浮脈に含まれる為、浮芤＝芤脈である。

沈脈に関連する脈状

沈脈と多く見える脈状は、細脈、緊脈、伏脈である。

（1）細脈は沈細として最も多く見える。沈細は沈小と通用する。浮大と相対である。沈微、沈濇は沈細の系統であり、表す病證は近しい。

（2）緊脈は、沈緊として、「心下痛」等を表す。ま

た、同じく輪郭のはっきりした脈状である沈弦は「懸飲内痛」等を表す。

（3）伏そのものが沈脈に属する。沈伏＝伏脈である。

数脈に関連する脈状

数脈と多く見える脈状は、滑脈、促脈、代脈である。

（1）滑脈は、滑数として見える例が多い

（2）促脈、代脈は二十四脈状条文中で数脈の規定が有る。どちらも傷寒に対する誤治を示す脈状で、予後不良の脈状である。

（3）数脈は主に熱を表す脈状である為、浮大、浮実等と多く見える。

沈脈に関連する脈状

遅脈と多く見える脈状は、緩脈、結脈である。

（1）緩脈は、二十四脈状で遅脈よりやや速い脈状とされる。しかし、『脈経』中の緩脈は、急と相対であり、脈の往来が緩やかな脈状を表す。数、疾と相対し、往来の速度を表す遅脈とは意味が異なる。ただ、緩遅＝往来が遅く緩やかな脈状として見える例は多い。

（2）結脈は予後不良の脈である。

（3）遅脈は数脈に属する脈状以外全てと見えるが、寒を表す性格上、沈脈、弦脈、緊脈と多く見える。